

被災地での障害者の孤立を防ぎ 地域生活を創造

独立行政法人福祉医療機構（WAM）が行う社会福祉振興助成事業（WAM助成）は、国庫補助金を財源とし、高齢者・障害者などが地域のつながりのなかで自立した生活を送れるよう、また、子どもたちが健やかに安心して成長できるよう、NPOやボランティア団体などが行う民間の創意工夫ある活動などに対し、助成を行っています。

今号では、WAM助成を活用した特定非営利活動法人ポラリスの取り組みを紹介します。

復興が進むなか 障害者の社会資源不足が課題

宮城県の東南端に位置する亘理郡山元町は、東日本大震災で津波による甚大な被害を受けた地域である。震災から5年以上が経ち、平成28年12月に交通の要であるJR常磐線山下駅が移転を経て運行を再開するとともに、災害公営住宅が完成するなどハード面の復興は進んでいる。

その一方で、被災地においては、行政の支援は主に被災者や高齢者に充てられ、障害者への対応は後手に回っている現状があり、と

くに山元町では障害者が日中活動できる社会資源は社会福祉協議会が運営する山元町共同作業所の1カ所のみで、被災した障害者が気軽に利用できる居場所や社会参加の機会が極めて少ないことが課題となっている。

このような状況のなか、平成27年5月に設立された特定非営利活動法人ポラリスは、障害者支援を中心に地域住民を巻き込んだ地域コミュニティづくりに取り組むことで地域の再生を目指している。

法人の設立経緯について、代表理事の田口ひろみ氏は次のように語る。

「もともととは社協の職員として、山元町で唯一の福祉作業所の施設長を務めていましたが、障害者の社会資源は乏しく、ひきこもり状態に陥っている障害者が多いことが課題になっていました。これらの課題に対し、障害者が活動できる新たな場所をつくる必要性を感じたことから、これまで社協で培ってきた

◆団体概要

〒989-2202
宮城県亘理郡山元町高瀬字台戦原72番地64
TEL: 0223-36-7410
FAX: 0223-36-7410
URL: <http://polaris-yamamoto.com/>
設立: 平成27年5月
代表理事: 田口 ひろみ

●助成実績●

○平成27年度

「被災地での障害者の孤立を防ぐ社会参加事業」

（助成額：135万9千円）

事業概要：被災地においては、行政の支援は主に被災者や高齢者に充てられ、障害者への対応は後手に回っている現状があることから、ひきこもりがちな障害者の孤立を防ぐことを目的に、障害者が地域住民と交流できる居場所や社会参加の機会をつくるとともに、心のケアを実施する事業

就労継続支援B型事業所や 心のケア事業などを運営

主な事業として、知的・精神障害者の就労支援継続B型事業所（定員20人）の運営をは

障害者支援のノウハウをもとに、NPOのもつ柔軟性を活かしながら支援したいと考えたことが設立のきっかけになりました。また、財政面を考えると、障害者支援を行政・社協だけに任せていけばよい時代ではありません。地域住民が主体的となってNPOの活動に参加してもらうことで、地域を創造していくことを目指しています」（以下、「」内は田口代表理事の説明）。





アート作品の創作活動に力を入れる同法人は、地元企業の依頼を受け、復旧した山下駅前に山元町の歴史をモチーフにした巨大壁画を製作

就労継続支援 B 型事業所では、施設外就労として、いちご農園で地域の特産品であるいちごの販売や清掃業務などに取り組む



じめ、地域コミュニティ創造事業、心のケア事業を実施している。就労支援のメニューでは「はたらく・たのしむ・学ぶ」をコンセプトに、施設外就労として、いちご農園で山元町の特産品であるいちごの販売や清掃業務などを行うほか、アート作品の創作活動などに取り組む。創作活動の取り組みの一つに、地元企業から依頼を受け、連携団体や地域住民と協働しながら、復旧した山下駅前に山元町の歴史をモチーフにした高さ2m、全長33mの巨大壁画を完成させており、復興のシンボ

ルとなっている。

さらに、利用者に対し、既存の福祉サービス以外に必要な支援についてヒアリングを実施したところ、「何でも相談できる場所がほしい」「生きがいになる楽しいことや仕事したい」などの声が寄せられたこと、また、平成26年11月に山元町が実施した障害者のアンケート調査結果を参考にして同法人では、孤立しがちな障害者の居場所・社会参加の場づくりに取り組んでいる。

障害者の居場所・社会参加の場づくりに取り組む

これらの取り組みは、平成27年度のWAM助成を活用し、「被災地での障害者の孤立を防ぐ社会参加事業」として実施した。

同事業は、孤立しがちな被災地の障害者が気軽に集い、地域住民と交流できる場や社会参加の機会をつくることを目的に、「居場所・社会参加の場づくり」として、①集いの場ワークショップの開催、②地域を明るくするボランティア活動、③調理交流会、④地域学習会を開催するほか、「対話による心のケアの場」として、⑤まちなかの保健室を設置した。集いの場ワークショップでは、孤立しがちな障害者が地域住民と交流しながら活動できる場として「絵画・工作ワークショップ」や、「うたカフェ」を開催した。

地域のさまざまな人たちとつながる場に行きたいことから、対象者を障害者に限定せず、開催案内のチラシを毎月配布したほか、連携団体などを通じて広く参加を呼びかけた。

「絵画・工作ワークショップ」（月3回／全23回）では、法人のアートスタッフの指導のもと、居心地のよい雰囲気の中、利用者一人ひとりの個性や可能性を引き出しながら、地域住民と一緒に創作活動に取り組んだ。常識にとらわれない独創的な作品をつくる利用者も多く、周りから評価されることで大きな自信となり、利用者同士が互いに認めあうことで、ひきこもりがちであった障害者が地域に一歩踏み出すきっかけとなった。

継続的に参加する利用者のなかには、同法人の就労支援の利用につながったケースもあり、創作活動のメリットとして、生きがいになるだけでなく「細かい作業が得意」「同じ作業が続けられる」などの特性を分析できるため、その人にあった仕事を提供することにも役立つという。

また、オペラの音楽家を講師に招き、歌やダンス、対話を楽しむ「うたカフェ」（月1回／全8回）は、利用者から高い人気があり、毎回多くの参加者を集めた。地域住民に広く参加を呼びかけ、100人規模のイベントを2回開催しており、利用者の心を癒すとともに地域住民と交流を深めることができた。

助成期間中（平成27年8月～28年3月）の集いの場ワークショップの利用実績は、「絵画・工作ワークショップ」は延べ328人、「うたカフェ」は延べ324人の参加があった。

地域貢献につながるボランティア活動を実施

「地域を明るくするボランティア活動」は、



この著作物は著作権法、国際条約およびその他の知的財産権に関する法律や条約によって保護されています。版權者（独立行政法人福祉医療機構）ならびに著作権者の許可を得ない複製（コピー）、再配布を、固くお断わりいたします。



「絵画・工作ワークショップ」では、利用者一人ひとりの個性や可能性を引き出しながら、地域住民とともに創作活動を実施

歌やダンス、対話を楽しむ「うたカフェ」は、毎回多くの参加者が集まり、地域住民との交流を深めることができた



「調理交流会」には、親子での参加が多くありましたが、災害公営住宅で一人暮らしをしている男性もいたもので、地域のボランティアに協力してもらい、おにぎりやサンドイッチなど比較的簡単な調理実習を行い、つくった料理を参加者で楽しく会食する場

屋外での社会参加の場として園芸活動（月3回／全23回）や清掃活動（月1回／全7回）を実施し、地域住民とともに地域貢献につながるボランティア活動を行った。

園芸活動では、園芸に詳しいボランティアから土づくりや花の栽培方法の指導を受け、花を植えたプランターを地域のバス停や集会所などに設置した。清掃活動では施設周辺のゴミ拾いや公共施設の草むしりなどを行い、近隣住民と挨拶や会話を交わしたり、感謝の言葉を直接かけられる経験をする中で活動への意欲や自己肯定感を高めることにつながった。

屋外活動での社会参加の場をつくった理由について田口代表理事は、「過疎地域は車で移動することが多く、都市部に比べて運動不足になりがちです。さらに参加者の大半は仮設住宅に入っていたため、とくに高齢者は震災前から体力が大きく低下していましたの

調理実習を通して障害者の食育や生活スキルの向上を図る

そのほか、居場所づくりでは、地域住民と交流しながら食事をする機会をつくるとともに、障害者の食育や生活スキルの向上を目的とした「調理交流会」（月1回／全8回）を開催し、延べ155人（障害者83人）が参加した。

で、負担のかからない範囲で外に出て歩いたり、身体を動かすことが非常に大事な時期でした」と振り返る。

ボランティア活動の参加実績は、園芸活動は延べ223人（障害者120人）、清掃活動は延べ66人（同42人）の参加があり、これらの活動は設立から間もなかった同法人の取り組みを地域に周知することになったという。

としました。また、買い物は地域で生活していくために欠かせないスキルになりますが、実施の際にはスタッフと一緒に買い物に出かけることで、普段そのような機会のない障害者にとって必要な食材を予算内で購入する訓練にもなりました。

さらに、地域で暮らす障害者の社会参加を促進できるよう、障害者福祉や地域の課題をテーマにした「地域学習会」を毎月開催し、見聞や視野を広げて自己選択・自己決定できる力をつけることを支援した（全8回／延べ参加人数87人うち障害者66人）。

学習会のテーマとしては、人権の尊重など憲法に関することをはじめ、交通手段やルール、個人情報・プライバシーのほか、携帯電話を使う障害者が増えていることから料金を節約しながら活用する方法や、自分たちの暮らす地域に誇りをもてるよう山元町の歴史などについて学んだ。

地域学習会は、社会保険労務士の資格取得を目指している同法人の精神障害のある利用者が中心に企画したことで、地域住民を交えながら当事者目線に立った学習会にすることができたという。

気軽に相談できる場として「まちなかの保健室」を設置

そのほかにも助成事業では、対話による心のケアの場として「まちなかの保健室」を設置し、精神保健福祉士である田口代表理事を中心に障害者等の相談を受けている。

「被災地ということもあり、まだまだ心の



ケアを必要とする人は多くいるため『まちなか心の保健室』では、障害者に限らず相談に訪れた人に随時対応する体制としました。心のケアが必要なことを周りに知られたくないことから、病院を受診せず症状を悪化させるケースも少なくありませんが、当法人では障害のあるなしに関わらず、さまざまな人たちが出入りしていますので、気軽に相談しやすい環境があると思います。また、社協にいた経験から行政や精神科医とのネットワークがあるため、必要な際にはスムーズに連携できることも強みとなっています。

さらに、心のケアの取り組みとして「みやぎ心のケアセンター」（公益社団法人宮城県精神保健福祉協会）の協力を受け、「心のケアカフェ」を定期的に開催。カフェの参加者はそれぞれの近況や生活の課題などを出しあい、毎回そのなかからテーマを決定し、専門



「調理交流会」は、調理実習を通じて地域住民と食事を楽しむ機会をつくとともに、障害者の食育や生活スキルの向上を図った



地域で暮らす障害者の社会参加を促進するよう、障害者福祉や地域の課題をテーマにした「地域学習会」を開催

人材を育成し、行政の支援につなげる

特定非営利活動法人ポラリス

代表理事 田口 ひろみ氏
(精神保健福祉士)



平成27年度のWAM助成で実施した障害者の居場所・社会参加の場づくりの取り組みでは、障害者一人ひとりの個性に向きあい、生きるための意欲向上につながる社会参加の機会を得たことで、地域生活に対する安心感を高めることができたのではないかと感じています。

参加した障害者が笑顔でいきいきとした表情に変わったことを、本人以上にご家族が驚いていたのですが、障害によってできないことを悲観するよりも、できることの可能性を保護者に感じてもらえたことは大きな成果だと考えています。

また、ある程度実績を残せたことで行政から話を聞きに来てくれるなど、連携することができるようになりましたので、行政や社協、NPO法人の役割分担を明確にし、行政の支援につながる事業を実施していくためにも、今後は人材育成に取り組んでいきたいと考えています。

体の参加者は、数値目標に掲げた800人をもり状態にあった延べ1732人に達し、ひきこ

医からアドバイスを受けた。うつ病やひきこもりなどの経験者に体験談を話してもらい、同じ課題を抱える家族へのピアサポートの場にもなった。

加につなげた。現在も一部を除いて居場所・社会参加の場づくりの活動は継続されており、働く意欲が高まったことで、事業終了後に同法人の就労支援の利用につながったケースも多くあったという。

障害者の支援資源が不足するなか、地域住民を巻き込みながら、新たな資源づくりや地域交流のプログラムを構築する同法人の取り組みが全国に広がるのが期待される。



社会福祉振興
助成事業に関する
お問い合わせ

●NPO リソースセンター

NPO 支援課 (助成事業の相談・募集に関するお問い合わせ、NPO の融資相談・審査に関すること)
TEL : 03-3438-4756

NPO 振興課 (助成事業の広報、助成事業の完了・事業評価に関するお問い合わせ)
TEL : 03-3438-9942 FAX : 03-3438-0218 (共通)



この著作物は著作権法、国際条約およびその他の知的財産権に関する法律や条約によって保護されています。版權者（独立行政法人福祉医療機構）ならびに著作権者の許可を得ない複製（コピー）、再配布を、固くお断わりいたします。